

# 暴力の連鎖を解くために－ジェンダー研究という知恵袋

巻頭言

たけなか ちはる  
竹中 千春

イラクでは、米軍の掃討作戦と武装勢力の砲弾攻撃や自爆テロが続いています。戦後の和平化を進め、女性の政治参加と民主化を実施したアフガニスタンも、内戦的な状況に後退しつつあります。このように残酷な暴力を社会に根付かせる力とは何なのか、国際政治の大問題です。

さて、もう少し小さな規模の社会で起こる暴力については、社会学・精神分析学・心理学・ジェンダー研究など多方面から分析されてきました。家庭内暴力(DV)や児童虐待は、小集団の中で強者が弱者にふるう暴力です。被害者は妻や幼い子ども、病氣や障害を負った人、年老いた親に集中します。暴力的な人間関係は、暴力的な思考と行動様式を育て、夫から妻に、親から子に継承されます。今日の被害者が明日の加害者となるわけです。

小さな社会での「暴力の連鎖」の分析を、国際社会の分析にも適用できないでしょうか。武装勢力が活動する紛争地域、盗賊団が跋扈する辺境、マフィアが仕切る都会の闇社会。暴力的な組織とそれを動かす人々、彼らを生み出す男性中心の社会。小さな社会の暴力と大きな社会の暴力が結びつき、暴力的な組織と主体を育て、暴力の連鎖をつくって戦争・内戦・暴動・テロへと展開します。

日本でも、対テロ戦争の棚卸しがようやく始まりました。この戦争で世界が平和になったのか、戦争に協力した国の国民として暗澹とした気持になります。しかしだからこそ、暴力の連鎖を解く別の方法を真剣に考えるべき時です。その意味で、女性や子どもの視点から暴力を捉え、平和を取り戻す方法を考察してきたジェンダー的な実践や研究は、国際政治学にとって新たな知恵の宝庫ではないかと感じています。

■プロフィール 明治学院大学国際学部教授。専門は国際政治・インド政治。著書に『世界はなぜ仲良くできないの？暴力の連鎖を解くために』（阪急コミュニケーションズ、2004年）。共著に『平和政策』（有斐閣、2006年）、『アジアの政治経済・入門』（有斐閣、2006年）、『現代市民政治論』（世織書房、2003年）、『民族共存の条件』（早稲田大学出版部、2001年）など。